

当世アンケート調査談

神戸大学経済経営研究所教授

片山 誠 一

私は、研究所の所長をつとめる以前アンケート調査をして基礎データを集めてそれを解析するような仕事をしたことはない。2年前在任中初めてそれをやった。その後、この研究目的のために類似のアンケート調査を一度行った限りなので、それに関しては全くの素人である。もちろん研究の手法としてどうしても必要であるがゆえに行ったものであるが、初めて挑戦する気になったのは些細なことだが次の理由による。当研究所でアンケート調査に基づく研究では定評のある先生から、所長職にある時の数少ないメリットの一つは、その名で調査依頼ができるせいか、回収率が高くなるということを伺ったからである。さらにアンケート回収率を高めるための注意事項を事前に聞いた。どうしても研究費がかぎられているからコスト・ベネフィットを高める必要があり、必要最小限の知恵を知っておきたかったからである。最も気を付けなければならない第1条は、「ビール片手に持って回答できる」設問を作ること。言い換えれば、平易であってしかも、多少気分がよくなっても正確に答えられ、回答を途中で投げださないよう最後まで答えてもらえるように問題を設定することであった。これは、簡単なようではなかなかの難題である。特に、アンケートが依頼されるようなサンプルには、問題次第では調査が集中することが考えられるからである。所長在任中に行った直接投資と知的所有権に関する調査の回収率は、25%弱であり、さらに1年後退任後におこなった同種の調査の回収率は遥かにそれに及ばない数値であったので他の回収情報を総合して、所長在任に行うこととそうでないときの間には優位な差がある。先生のご指摘どおりの結果に感心すると同時に、所長であることがこうも影響があってよいのか不思議に思った。同じ平教授であって研究所のプロジェクトの一環として調査を行うようにうたっているにもかかわらずこの結果である。

政府の行う指定統計には回答が義務づけられているが、我々が行うものには回答のインセンティブなど殆どないといってよい。ただ学術目的のために少しでも貢献してやろうという善意に頼るだけである。これに関して面白いことは、第2回目の一部を中国で行った経験である。やはり、お国柄か日本との違いがあるように思えて仕方ない。両国でアンケート事情に、はたして統計的に優位な違いがあるか検定するにたるほど十分な調査を行っているわけではない。しかし、直感的には確かに中国で同様な調査を行うとより困難であると感じられたが、其れは我々の準備不足のためだけであっただろうか。アンケート調査も極めるのは、それだけの経験と知識が要る。また、貴重な研究資料である政府指定統計が、より簡単に使えるようになってもらいたいものである。